第８回 企画展

近世 小松島商人の蔵書

―多田・西野家文庫を中心に―

平成６年４月26日(火)～７月31日(日)

文化の森総合公園
徳島県立文書館（もんじょかん）

展示図録目録用

多田家・西野家について

―在郷町小松島の豪農・豪商―

勝浦川の沖積平野に古くから開発されていた小松島は、江戸時代にいたって徳島城下の補助的役割をになう土地として重視された。元禄期ごろまでには在郷町として発達し、新田開発をすすめる大地主や廻船業をはじめ藍商・紺屋・米屋などを営む商人など豪農や豪商が数多く生まれた。多田家と西野家は近世小松島の繁栄を象徴する富豪である。

多田家

小松島金磯新田の開発で知られる多田家は、初代が上野国(群馬県)より一六四四年(正保一)頃、勝浦郡小松島浦に移り農耕のかたわら商業を営んだといわれる。当主は助右衛門を名乗ったが、三代の時干潟を埋立て新田開発に取り組みこの功績により御目見と帯刀が許された。一七二五年(享保一〇)に金磯新田と呼ばれるようになり、六代目のとき金磯新田村として独立した。七代の時、一七八六年(天明六)苗字帯刀が許され多田姓を名乗り小高取に昇進した。「撃攘子」と号し、文人画をよくしたのは八代目助右衛門である。

多田家全景

勤王家・海防功労者として著名な多田宗太郎は九代目で、石翁・石竜と号した。先祖代々取り組んできた新田(総面積一二五町歩)の開拓事業を一八六二年(元禄二)完成した。幕末の一八六二年(文久二)沿岸の海防のため、金磯弁天山に八門の砲台を築き藩主に献じた。その功により藩主斉裕は宗太郎を郷士格に昇進させ、「兵士家十二軒人数四拾人」を砲台御用に命じ、その監守を勤めさせた。

西野家

讃岐琴平の清酒「金陵」で知られる西野家は、小松島の藍商野上屋がルーツである。「西野家譜」によると、初代は東国より小松島に移住、三代の六兵衛の時、下総(千葉県)で藍玉販売をはじめたとされる。一七一九年(享保四年)四代嘉右衛門の時、下総寒川に藍店を開店し阿波藍の直接輸出に乗り出した。七代の時、江戸に支店を構え、一七七三年(安永二)には加子役御免・脇差御免となり苗字帯刀を許された。八代目は一八〇〇年(寛政一二)琴平に酒店・金物店を開業、その豪遊は江戸で阿波大尽とうたわれた。中興の祖といわれる一二代嘉右衛門は野上屋の大印を「才」とし、一八五九年(安政六)藩に調達金一千両を上納、一八六八年(慶応四)小高取を与えられた。一八六九年(明治二)には徳島藩の会計御用掛・為替方頭取となり、一八七一年(明治四)商法為替掛頭取を勤めた。一三代保太郎の時、一八八七年(明治二〇)「家憲」が定められた。

一五代嘉右衛門は実業家・貴族院議員。阿波藍の販売に従事。一九一〇年(明治四〇)香川県詫間村に四八・六町余の塩田を開拓、一九一七年(大正六)西野染料店を開店、ドイツのバイエルン社と特約店契約を結び染料商として活躍。一九一八年(大正七)株式会社金陵西野商店とあらため、清酒金陵が営業の中心となり、小松島は地主経営の拠点となった。『阿波国徴古雑抄』『阿波藍沿革史』の刊行に尽力するなど文化事業に貢献した。

戦後の農地改革で農地解放を余儀なくされた。一九四八年(昭和二三)株式会社西野商店となり、一九五九年(昭和三四)樹脂工場設置。一九八二年(昭和五七)西野金陵株式会社に変更。現在では酒造・酒類・食品卸・化学品の製造販売など多角的に経営をおこなっている。

西野家土蔵

ごあいさつ

今回の展示で御覧いただく書籍を収集された多田・西野家は、徳島を代表する江戸・明治期の豪農・豪商でした。その多種多様な書籍の存在は、江戸時代の文化・出版事情を知るうえで貴重な資料となるだけでなく、封建制度のもとで力を蓄えてきた振興勢力としての知的バイタリティーを示すものでもあります。

多田・西野家資料は、現在、小松島市教育委員会の所有になりますが、これらの資料の整理に関して徳島県立文書館は全面的に協力いたしました。その理由は、所有者がどこであるかということとは別に、「文化財は国民・県民の共有財産」であるという立場に立ったものであります。

現在、県下には二十数館に及ぶ資料館が存在し、その土地の貴重な資料を収集したり、展示したりしております。しかし、これを科学的に管理する専門職員を配置している資料館は数館しかありません。

従来、村々に残された在地資料は、土蔵や木造建築の中で長年のあいだ自然環境の中で保存されてきました。土や木は湿度を調整し、外気との通気性を保つことが出来ます。このためにカビや虫害を最低限に抑えてきました。

鉄筋コンクリートの公共施設が出来るにしたがって、燃えない建物だから大丈夫だろうと考え、市町村教育委員会や自治体史編さん室が、土地の貴重な資料を収蔵するようになりました。しかし湿度の高い多い日本では、通気性がない鉄筋コンクリート建築で収蔵する場合には、極めてこまめな人為的手入れをする必要があります。それをしないと、一度吸った湿度を閉じ込めて資料をカビさせ、虫類の快適な住居とすることになります。

小松島市教育委員会から、保存と整理についての相談を受けた本館では、市町村教育委員会や施設との、保存に関する協力のあり方の一つとして、全面的に協力をすることにいたしました。県下の資料館が、連帯・連携し、保存についての知識・経験を交流し、住民にとって魅力のある資料館にするために種々の協力をする必要があります。今回の展示がこうした連帯の成果として、県下の諸機関・資料館どうしの協力のきっかけになることを強く願っています。

展示に当たり、御協力をいただいた小松島市教育委員会、多田・西野両家ほか関係者すべてに対して深くお礼を申し上げるものであります。

平成六年四月二十六日

徳島県立文書館長　大和武生

【表紙写真説明】

那賀郡岩脇川船渡の図
—撃攘子の写生帳より—

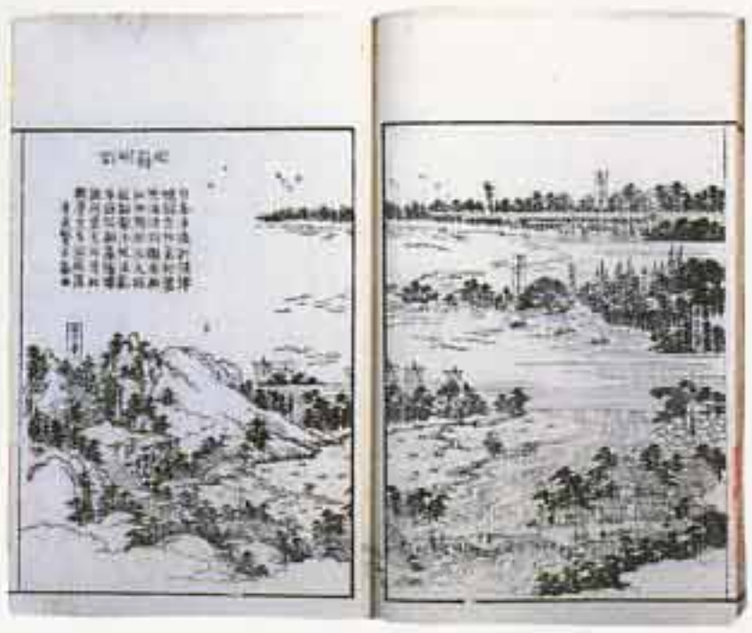
撃攘子(げきじょうし)は小松島金磯新田の開発で知られる多田家の第八代当主助右衛門(一七七三～一九二七)の画号。

閑々子と親交があり、家業のかたわら絵筆をとった。多田文庫には文人画の習作が数多く残されている。この写生帳には、和綴・横帳で那賀郡岩脇村から太竜寺まで風景が二七枚描かれている。

【背景下絵図】

日峯眺望　—『阿波名所図絵』より—

『阿波名所図絵』は、探古堂墨海の著。一八一一年(文化八)刊。上下二巻。鳴門や祖谷かずら橋など阿波国内の名所旧跡が木版画の挿し絵入で紹介されている。表紙の背景下地は小松島の景観(原図参照)を浮き彫り風にアレンジしたもの。



〈原図写真〉

二、藩との結びつきを示す藩の出版物

藩刊行物『資治通鑑綱目全書』『瀛環志略』(世界地理)『うづかもと』(藩主・斉裕の歌集)『小学訓点』『五経訓点』『四書訓点』(三点は藩校教科書)『阿波志』(藩編纂の地誌)などを揃えているのは、藩との強い関係を示します。

三、地域文化と文化人に関する資料

高橋赤水・柴秋邨・岡田鴨里・岩本贅庵・賀川子玄・池辺真榛・閑々子など阿波に関係深い文化人の著書、『淡路常磐草』『阿波名所図会』など地域に関する資料は、両家の地方文化への関心と貢献を示すものであります。

四、激動の時代への関心をしめす資料

両家の資料の中に、大塩平八郎事件、ペリー来航、王政復興などに関する「聞書」数冊が含まれています。新しい時代への強い関心がうかがわれます。

『資治通鑑綱目全書』の一部

SIGNATURES

になっている。西野家の蔵書印は、かなり凝った作り方をされており蔵書に対する強い愛着が感じられる。

さらに④の写真は、『資治通鑑綱目全書』に貼られた、西野家専用の整理用ラベルである。ここまで整理せねばならないほど多くの本が西野家に集められたことを示している。

阿波国文庫(あわのくにぶんこ)

今回の資料整理で、多田・西野家の資料類から、四点の「阿波国文庫」の蔵書印が押された和本が発見された。志摩の国(三重県)に付いて書かれた『志陽略志』二冊と、江戸時代に作られた漢文体の讃岐国(香川県)の歴史書である、『讃岐国大日記』二冊である。「阿波国文庫」は、旧阿波藩主蜂須賀家の蔵書で、その数は六万冊を越え、種類も多岐に渡っていたとされている。⑤の写真は『讃岐国大日記』に押された「阿波国文庫」の蔵書印であるが、下に「不忍文庫」という蔵書印が押されている。これは、一四代藩主斉昌に厚遇を受けた江戸の国学者屋代弘賢が藩に献上した旧蔵書であることを示している。

⑥の写真は、『志陽略志』に押された蔵書印であるが、「阿波国文庫」の右下には「消」の字が押され、上に「吉田文庫」という印が押されている。これは、いつの時点かはわからないが、「阿波国文庫」が吉田という家に買われ、「消印」が押されたことを示している。「吉田文庫」は、はっきりとはしないが、那賀郡のある神官が所蔵していた本であるようである。その本がさらに多田・西野のどちらかの家に買われ、現在まで残ってきたのである。

④ 『資治通鑑綱目全書』より

⑤ 『讃岐国大日記』より

⑥ 『志陽略志』より

多田・西野家文庫の特色

多田・西野家の書籍の分析は、両家の主人や家族など個人の好みの枠を越え、地方豪農や豪商の置かれた立場を示す資料であり、また地域の文化状況をも示すものであります。

近世～近代前期には、地方の素封家には、地域に対する社会的役割というものがありました。「あそこに行けば、こんなものがあり、まさかの時には貸してもらえる」という暗黙の了解みたいなものがあったのです。例えば、結婚式の時に使う食器や座布団のように分量が多くて、数年に一度使うかどうか分からないものは、一般の家庭では常には備えてなくて、必要な時には近くの素封家に借りに行きました。こうした大家は単なる金持ちではなく、近所の信頼のある旧家でありました。

高価な書籍も、そのような性格を持ち、地方豪族の誇りと、社会的要請のためにも備える必要がありました。このため多田・西野家の蔵書も家族の好みだけで揃えられたものではありません。この立場からの考察も見落とせません。

本来、資料整理の立場からすれば、蔵書は家単位で検討しなければなりませんが、この書籍群は分け難く混合しているので、まとめて両家の傾向を見てみます。

一、封建思想としての朱子学系統の書籍群

江戸時代は儒学のうちでも朱子学が「封建教学」として幕府や藩から奨励されました。こうした社会情勢を示す「四書」「五経」などの漢籍が大きな比率を占めます。

& SEALS

種々の蔵書印

多田・西野家の和本には、蔵書印の押されているものが多い。古い書物に朱で押された印はたいへん目立つ存在である。

そもそも蔵書印は、元来散逸しやすい書物のため本の貸出や盗難にあたって、所蔵が不明確になることを防ぐ目的でに押されたものである。さらに、その本に対する愛着の心情から、蔵書印の形式には一般の印章とは趣を異にした多彩なものがみられる。しかも、現在に至ってみれば、その本の履歴を示す一級の資料であるといえるのである。

多田・西野家の蔵書印

① 『大坪流馬の絵図』より

①の写真は多田家旧蔵の『大坪流馬の絵図』という本に押された「多田文庫」という蔵書印である。多田家旧蔵の本に蔵書印は少ないが、最も簡素な形の蔵書印といえるだろう。

下の写真は、すべて西野家の蔵書印である。②は『資治通鑑綱目全書』に押されたもの、③は『方鑑秘竅』に押されたものである。②の写真の下の印は、「仁志野蔵書印」と書かれ、西野家の蔵書である。上の印には「正其義　不謀利　明其道　不計功」(正その義は、利を謀らず。明その道は功を計らず。)と書かれ上下で対の印になっている。また③の写真の上には、「阿陽城南」(阿波国の城南)という蔵書の場所を示す印、下には「仁志野印」が押されておりやはり対の形

② 『資治通鑑綱目全書』より

③ 『方鑑秘竅』より

封建思想の教科書

——『資治通鑑綱目全書』——

享和三(一八〇三)年二月に、藩主・蜂須賀治昭から『資治通鑑綱目』出版の命令を受けた藩の儒者・増田希哲(衡亭)が、三宅道乙の訓点による『資治通鑑綱目』に『明紀綱目』を付け足し、『資治通鑑綱目全書』として編纂を完了し出版したのは、文化六(一八〇九)年であった。

『資治通鑑綱目全書』は、次の四編(四種類の書籍群)から成り立っている。

前編　二五巻　一〇冊　明・南軒撰
正編　五九巻　七〇冊　宋・朱熹撰
続編　二七巻　二七冊　明・商輅・万安等撰
明紀　二〇巻　二〇冊　清・張廷玉撰

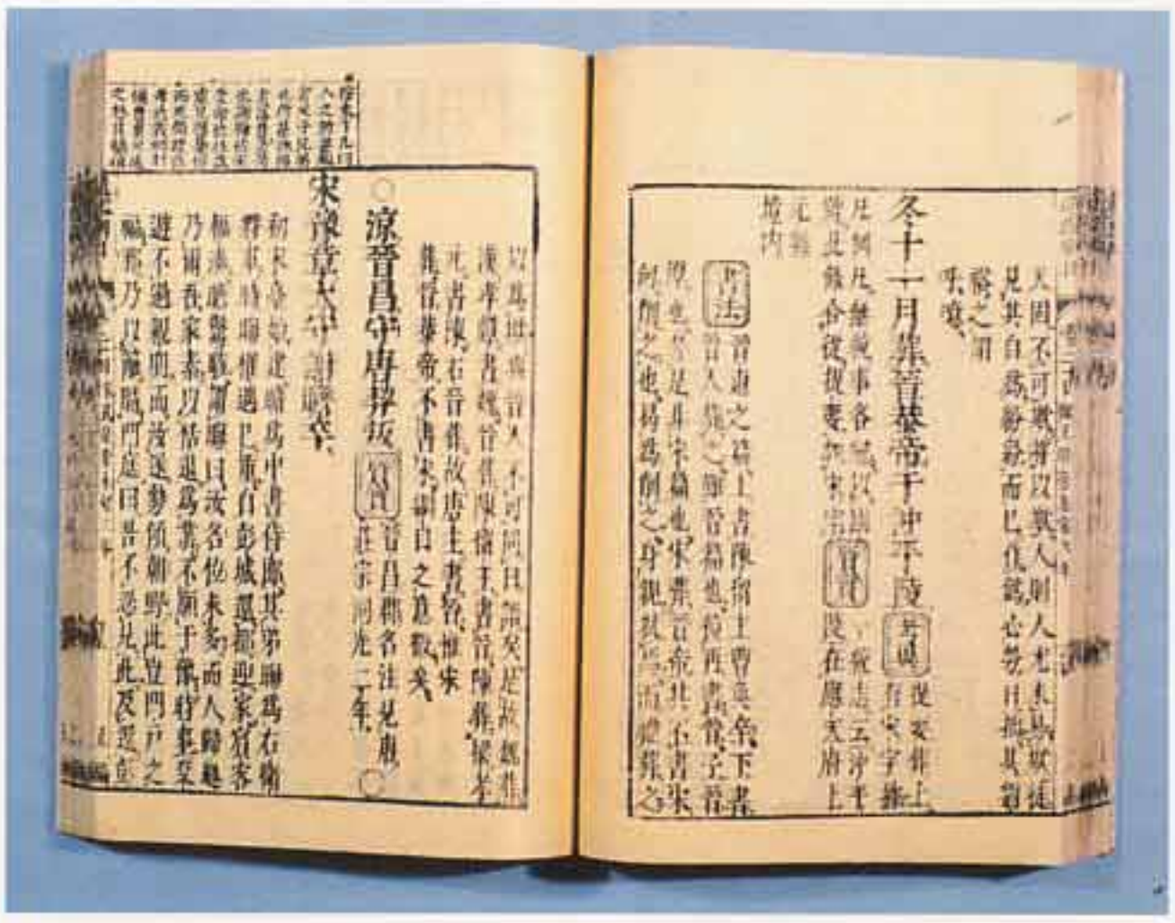
宋の司馬光は『資治通鑑』(二九四巻)を著して、政治の参考にしようとした。『資治通鑑』とは「治世の資料として鑑(かがみ＝見本)になる(通じる)」という意味から名づけられた。この『資治通鑑』をもとに、宋の朱熹が「綱(あらすじ)」を立て、門人の趙師淵に「目(細目)」で詳しく解説させたのが『資治通鑑綱目』(五九巻)であり、歴史事実よりも人としての義理(守るべき道)を説いたものである。扱っている時代は、周・秦・漢・晉・宋・斉・梁・陳・隋・唐の各王朝である。朱子学の政治思想が明確に表現された書で、日本でも朱子学者の必読の書とされていた。

『通鑑綱目前編』『通鑑綱目続編』は、朱子の書に準拠して書かれたが、それぞれ別々の書籍であり、「前編」は総論的で、「後編」は宋代と元代とを扱ったものである。

前編・正編・続編については、日本では、三宅道乙と鵜飼錬斎の二人が、訓読をつけた二種類の訓読本が出版されていた。ところが天明八年の京都の大火で両方とも版木が焼失し、出版できない状態であった。このために徳島藩主が、増田衡亭に編集・出版を命じたものであった。

増田衡亭は三宅道乙が訓読をつけた版木の焼け残りを買い取り、焼けた部分を新しく刻ませ、さらに『明紀』を新刻し、これに追加して出版したので「全書」と名づけている。同書には衡亭の跋文(はしがき)があり、出版にいたる事情が説明されている。

出版に当たり、藩では「通鑑綱目方」役所を設置し、改版(出版)事業に当たらせた。諸国の藩主への贈呈用には、川田の黄紙(きがみ)を使用し、家臣には自弁で白紙に刷らせたという。黄色の紙は、虫害に侵されにくく、一般に「阿波版通鑑」「黄紙通鑑」と呼ばれた。今回展示の『資治通鑑』は、この諸侯に贈呈されたものと同じ「黄紙通鑑」である。諸国の大名に贈呈されたものと同じものが、西野家に所蔵されていた事実は、日頃の藩への財政的貢献に対する見返りと考えられる。なお、版木は蜂須賀家に所蔵されていたが、のち散逸した。『資治通鑑綱目』を著した宋の朱熹は、通常「朱子」と呼ばれ、親に対する「孝」を中心とする孔子時代の儒学を、大規模な統一国家の統治思想に見合うように、君への「忠」を中心に組み替えた思想家である。このため朱子学は「新儒学」とも呼ばれる。



孝子とは ―『阿淡孝子伝』―

江戸時代における「孝子」という言葉を考えるとき、儒教思想から離れることはできない。「孝」は、儒教の基本教義のひとつである。孔子は、祖孫親子の上下秩序を「孝」とし根幹の道徳として政治が教化していくことが必要であるとしている。法のもとの平等主義ではなく、身分秩序を壊すことを許さない内容であった。江戸時代ではさらに、儒教の一派である朱子学が「正学」として学問の中心とされていたが、その朱子学では「孝」と君臣の身分秩序である「忠」を結びつけ「忠孝」として、君臣への「忠」と並んで親への「孝」を果たすことの重要性を強めていく。そこで藩主は、自分の領国から忠臣と並んで孝子を見つけだしては褒賞をあたえ、一般民衆の「忠孝」の身分秩序を中心とする道徳教化に利用していたということになる。

『阿淡孝子伝』後編

『阿淡忠孝伝』を著した福田愛信（一七五八～一八四三）は峨山と号し、本名を福田林右衛門篤信といい、徳島富田鷹匠町の人であった。藩の定普請役の雇から始めたが、行状良く、仕事には忠実で、褒賞を受けることがたびたびあった。また父の死後老母への孝養を尽くしたということで、老母が亡くなるまで、二人扶持をつけられ、さらについには、小奉行格として取り立てられ三人扶持七石を与えられるという、「忠孝」の道を身をもって示していた人物であった。さらに国学、漢学を学んだ知識人でもあり、『阿淡孝子伝』は阿波の「忠孝」道の集大成であるといえよう。文政二年（一八一九）に出版された前編は三冊で、出版時にはすでに物故者五四人を収録している。その後弘化元年（一八四四）に出版された後編は七冊に及び、存命者と前編の補遺を合わせ、一〇六人を収録している。

小松島浦清吉の話（『阿淡孝子伝』後編五巻）

清吉は、魚のかつぎ売りをする「ぼてふり」の商人だが、家田畑なく借家住まいの貧しさであった。六〇歳の母がおり九年前から中風を患って寝たきりとなり、五年前からは、脳の障害も現れた。しかし清吉は、よく母につかえ、朝は早く起きて母の食事を作り、夕はいち早く帰って、母の好物を求め、夜はおびえる母に添い寝をするほどであった。妻も、清吉と同じく母によく仕えていたが、三年前に若死にしている。その後は、仕事をする最中に看病する人がいないということで、毎日母を背負って親戚に預けていたが、後妻を迎え、その介抱をまかせ家業に励んでいる。文化五年四月に府（徳島）にその話が伝わり米二石を賜った。このとき清吉は三七才であった。

孝子伝の内容は、小松島浦清吉に代表されるように、清貧や苦労に耐えながらも「孝」を守るものに対して、身分に関わり無く褒賞が与えられるという藩による民衆教化を念頭に置いたものであったといえよう。

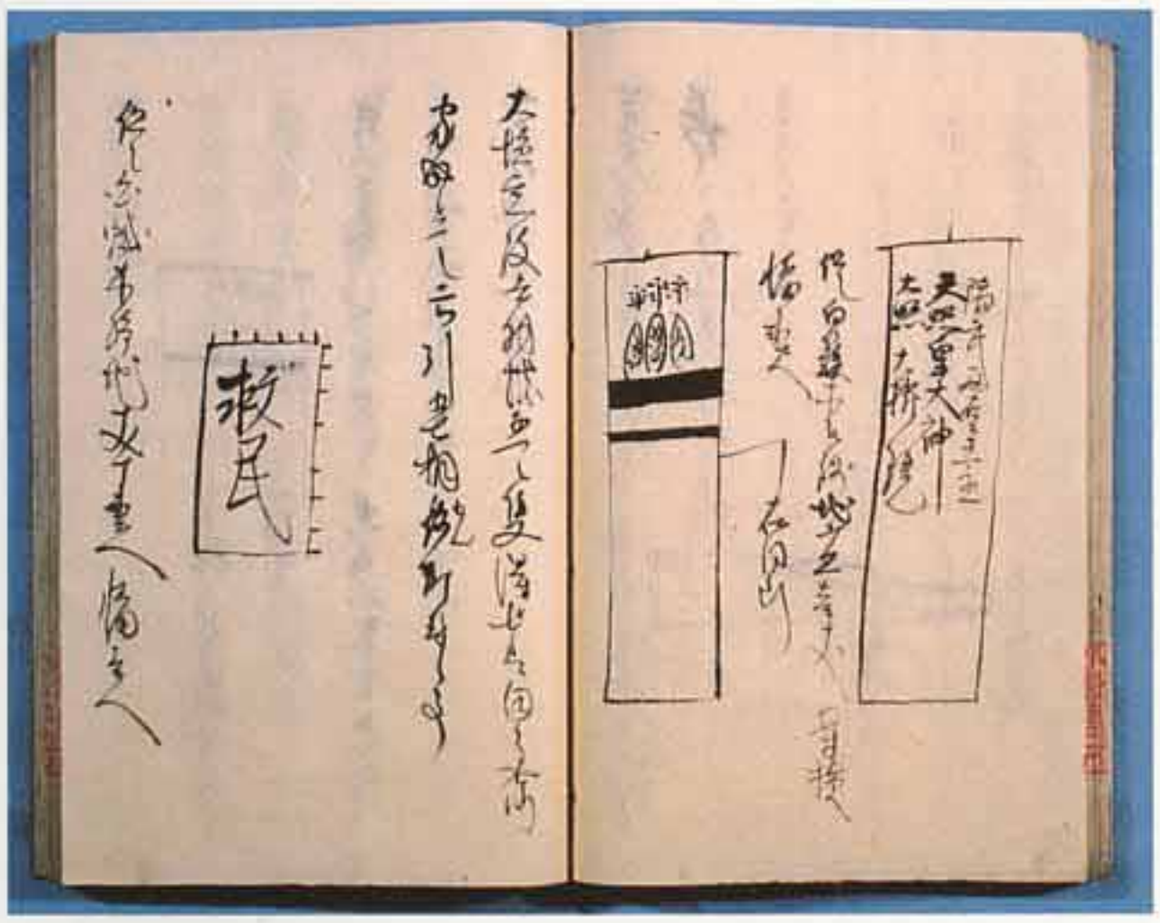
社会への関心

—『嘉永安政年間聞取書』ほか—

大塩平八郎の乱 —内憂—

江戸時代も後半にいたると、慢性的な赤字と借金の累積という財政危機や、大飢饉にともなっておこる百姓一揆や打ちこわしの頻発などは封建領主による強固な支配を大きく揺るがした。一八三七年(天保九)大塩平八郎の乱は、わずか半日でついえた蜂起であったとはいえ、もと大坂町奉行所与力という幕府の上級官僚が起こした騒乱であっただけに、幕藩体制そのものをゆるがす衝撃的な事件であった。大塩は腐敗した幕政を痛烈に批判し、全国の民衆に「世直し」への願望に大きな刺激を与えたものとおもわれる。阿波の各地においても大塩の乱が様々な形で記録にとどめられており、民衆の社会に対する意識の高まりを示している。

多田家においても、『天保八年四月大坂大塩騒動見聞記』『天保八酉年二月十九日大塩平八郎触書写一巻』が文庫の中に残されている。



大塩平八郎の乱に関する触書、大塩の檄文、人相書など、大塩騒動の顛末についての克明な一件記録であり、地域の指導者としての政治意識や社会意識を読み取ることができる。

異国船の来航 —外患—

大塩の乱の起きた年の夏、江戸湾の浦賀沖にアメリカ船が日本の漂流民を送還するため来航した。一八二五年(文政八)に出された外国船打払令により幕府は砲撃して撃退したが、交易を迫る外国船の来航は閉鎖的な鎖国体制をゆさぶり開国への胎動がはじまった。一八五三年(嘉永六)、ペリーの来航による強硬な開国要求とそれに屈した幕府の対応は、尊王攘夷運動を巻き起こし、内憂と外患に拍車がかけられていった。

多田文庫の『嘉永安政年間聞取書』には、一八四六年(弘化二)のアメリカ捕鯨船の浦賀来航、一八五三年(嘉永六)ペリー来航に関連した米国大統領の国書や各種の意見書、動員された諸大名の大森御陣の様子などが克明に記されている。また黒船や異国人の彩色の写生図も付され当時の人々の衝撃の大きさが生々しく伝わってくる。

また、『明治戊辰ヨリ辛未ニ至ル年間聞取書』には、幕府の崩壊後の戊辰戦争や「王政復古」など明治維新の顛末に関する記録があり興味深い。

池辺真榛と『古文書集』

阿波を代表する国学者で、幕末に尊王攘夷の立場で国事を論じた志士でもある。真榛は本名で、幼名は通太郎のち嘉右衛門を名乗った。通称は太平という。号を麻布垣内と称した。徳島藩士・樋口藤左衛門の家臣・池辺武右衛門の長男として生まれる。幼時より井上春城・吉成芳介に学び、長じて大坂の萩原広道について国学をおさめた。その後、本居内遠に従い強い影響を受けた。『古語拾遺新註』『栄華物語略註』を著し、内遠に激賞された。

蜂須賀斉裕は、彼の名声を聞き採用せんとし、安政六年六月一一日に、近従の速水敏三郎を通じて江戸に呼びよせ、世の中の動きと政治に付いて質問をした。その答えに感じて、任用しようとしたが、周囲に反対するものがあり果たせなかった。

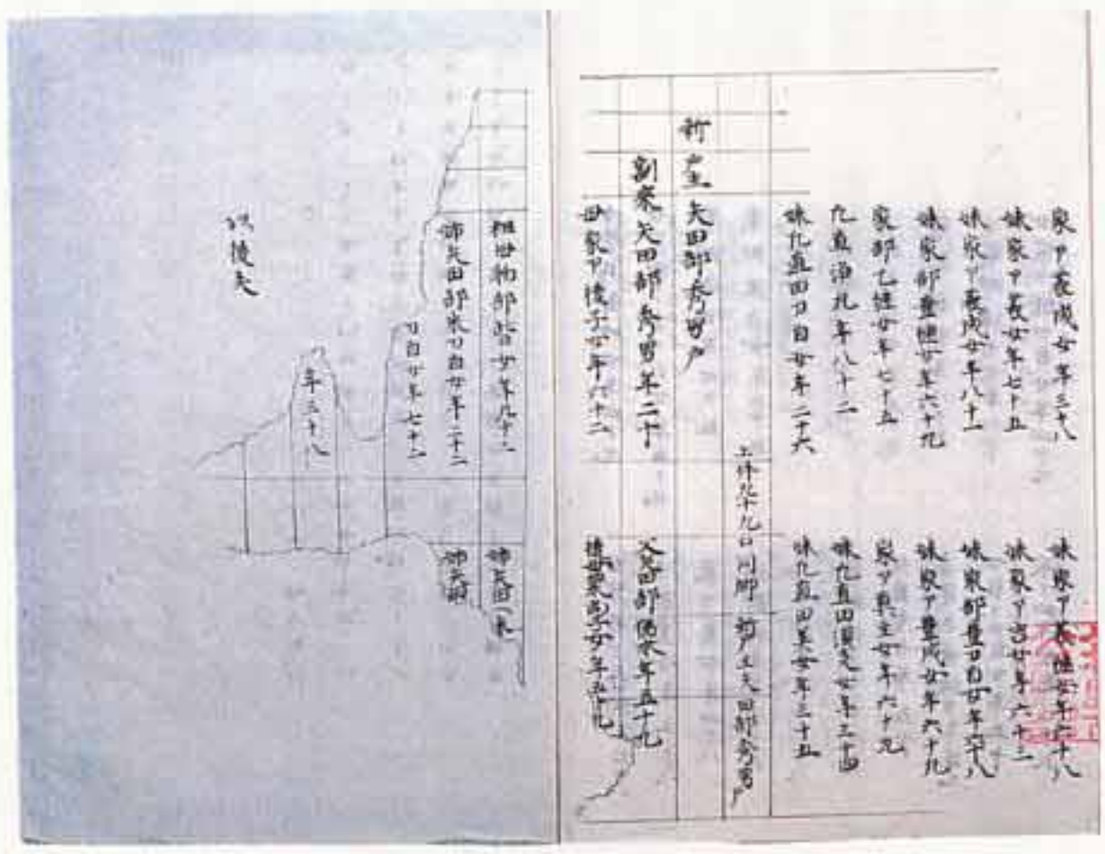
その時、太陽の光を浮雲がさえぎって僅かに光を漏らしている絵を描き、それに「可歎可謀可待可発(歎くべし、謀るべし、待つべし、発すべし)」という八文字の漢字を添えて真榛に贈った。「任用には反対者がいるからしばらく時機を待て」という意味である。

その後、郷里に帰り、文久元年に、南佐古の町田氏に身を寄せ、志士と交わり国政を論じた。文久三年春、藩政を批判したとして罪にとわれ、獄につながれること七か月、九月八日急病により三四歳で没した。

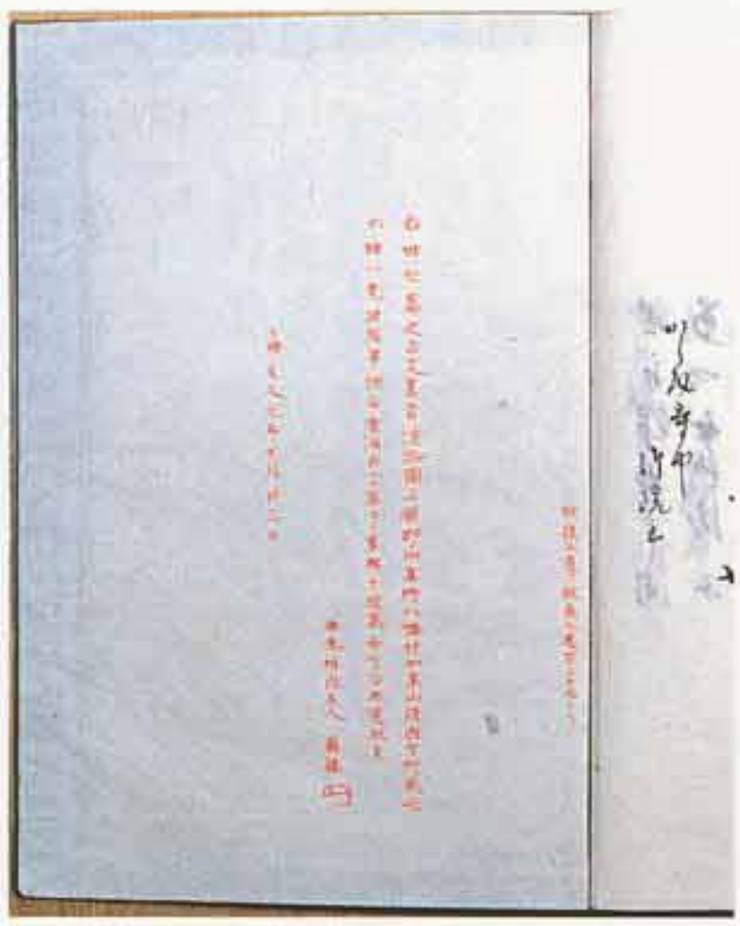
小杉榲邨とは、本居内遠の同門で親しく、真榛が獄中にある時に、榲邨も主家に幽閉されていた。明治二三年に、真榛の遺稿を収集・整理し、『栄華物語略註』を出版した。その序文に、真榛の人柄と学識をたたえている。

今回展示の多田文庫の中に、真榛直筆の筆耕本がある。『古文書集』と名付けられた五冊組の真筆本である。内容は、真榛が各所から筆記によって収集した貴重な資料である。

原本の文字を忠実に写し取っており、紙の破れまで正確に記録(写真A)し、また資料の所蔵場所を黒墨でなく、識別し易いように朱記(写真B)するなど、その正確さと、原点を明らかにするという実証的態度は、現代の科学的な資料収集・保存の方法論に通じるものである。なお、阿波国最初の国絵図とされる新島庄の絵図も、筆写されており、『阿波国徴古雑抄』で、小杉榲邨が公表する以前に、その存在を真榛が知っていたことを示すものである。なぜ、この資料が多田文庫の入ったかは不明であるが、真筆本として貴重である。



写真A　資料の破れを記録した部分



写真B　資料の出所を朱記で明記

展示資料目録

史料名	年代	大きさ(cm)	備考
壁面ケースA			
1　万国航海図	文久2年2月	92×176	T67
2　淡路国全図	明治3年	128×92	T97
3　阿波国海部郡街道図	(近世)	39×335	T101
4　四国名勝志阿波の部上	文化8年	27×17	T271
5　四国名勝志阿波の部下	文化8年	27×17	T270
6　燈下録　地	文化9年	28×20	T30
壁面ケースB			
7　間雅啓復　全	文化6年	25×17	T155
8　百山水	文政4年	35×25	T241
9　百植物	(文政)	35×25	T244
10　百人物	(文政)	35×25	T250
11　(写生帳)	文政3年2月	12×17	T433
12　資治通鑑綱目全書	文化6年	26×18	T301
展示ケースA			
13　讃岐国大日記	宝暦元年	30×21	T38
14　讃岐国大日記	(宝暦)	26×19	T272
15　志陽略志　乾	文政3年	23×17	T274
16　志陽略志　坤	文政3年	23×17	T273
17　大坪流馬之絵図	(近世)	27×20	T267
展示ケースB			
18　古文書集	文久元年	26×18	T22
19　竈神祭考	嘉永7年	26×18	T28
20　古今学話	弘化4年	27×20	T160
21　赤水文抄	天保12年	23×17	T159
展示ケースC			
22　阿淡孝子伝　中	文政2年	27×20	T381
23　阿淡孝子伝後編	文久2年9月	23×16	T46
24　重清孝子伝	天保13年7月	27×18	T144
25　作良閑理	天保7年2月	25×16	T37
展示ケースD			
26　大塩平八郎触書　一巻	天保8年2月	24×17	T91
27　御当国武鑑	安政4年2月	13×34	T179
28　嘉永安政年間聞取書	(近世)	25×17	T27
29　郷士格心得向記録帳	明治2年2月	27×20	T288

※備考の記号は文書館作成目録の請求記号です。
※会期中一部展示替えをすることがあります。

異色の僧　閑々子（かんかんし）

幼名は八重八。本名は天如。呼び名は峻山、のちに良夢と称した。また、号を閑々子または換水和尚・南方松林子とも言った。三好郡箸蔵村（現池田町）洲津の人。宝暦二年九月七日、代々庄屋を勤めていた北代（のちに来代）禎左衛門の二男として生まれた。幼少から仏門に入り、徳島市勢見町二丁目の千手院観音寺の快観上人に師事した。そのころ、麻植郡高越山にこもって修行したことがあり、干天続きで農民が困り、たびたび雨ごいの行事をしたが、効果がなかったので、閑々子に頼んで雨ごいの修法を行ってもらったところ、まもなく雨が降り出し大いに喜んだと言う。

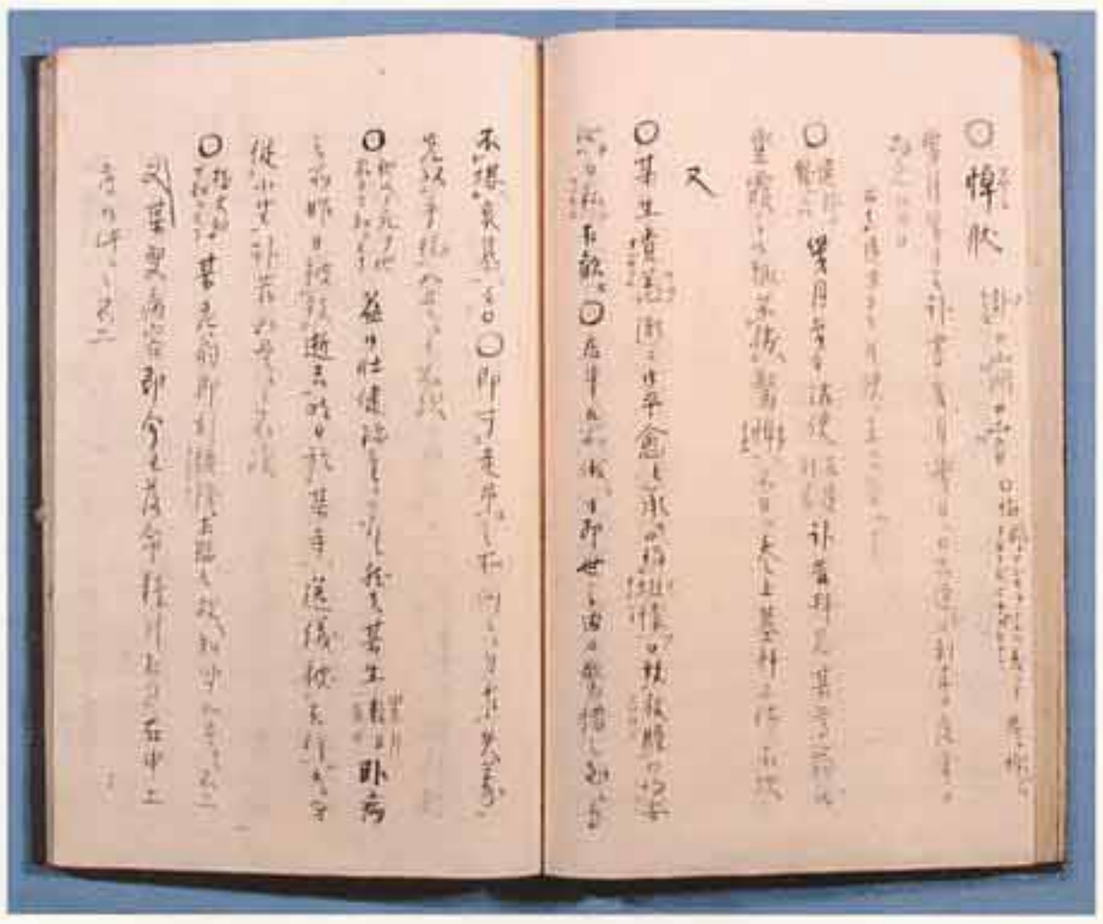
のち、法弟快本とともに京都に出て学んだが、師の快観の老衰により呼び帰された。その後、備中（広島県）井山の宝福寺の大雲禅師を訪ねて学んだ。ついで、奈良に出て東大寺など諸寺を歴訪して修行し、さらに河内の葛城山高貴寺の慈雲律師（母の桑原阿幸は徳島市出身で賢母として有名である。）について数年学び、仏学の奥義を極めた。

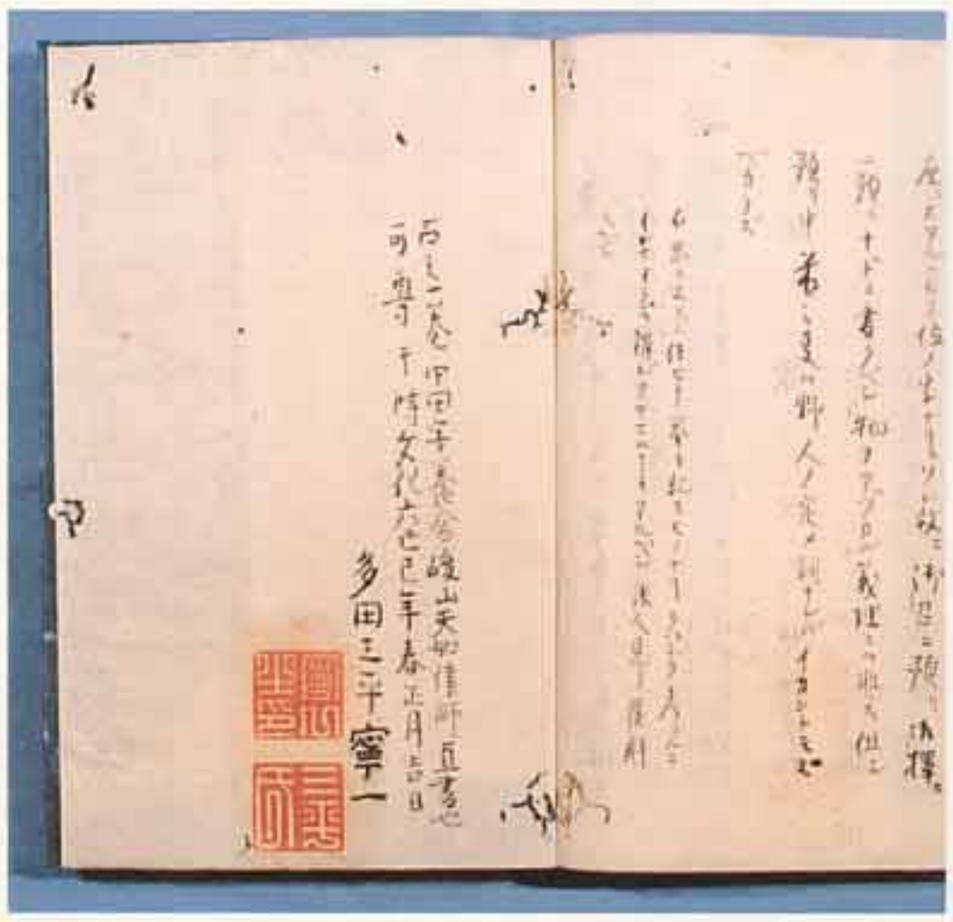
文化八年（一八一一）徳島に帰り、一一月に勢見の金比羅で神祇潅頂壇を開いた。ついで、南方玉厨子山（今の海部郡日和佐町の薬王寺の奥の院）に隠れて、小庵に籠もって数年修行した。のち、小松島市中田町奥林の豊林寺跡に草堂を結び、成願寺と称して住み、閑々子と号して修禅を怠らなかった。小松島では豪農多田家の庇護を受けたが、徳行を慕うものが多かった。多田家八代助右衛門夫妻と親交し、水墨画を助右衛門に学んだという。彼の小庵と多田家との間は、田のあぜ道や水辺が多く、その往復の途中、目にふれたカニ・エビ・カメ・カエル等が彼の画題となった。奇行の人としても有名で「阿波の良寛」とも言われ、門前に「祈念応ぜず、加持験なし」と書いてあったと言う。

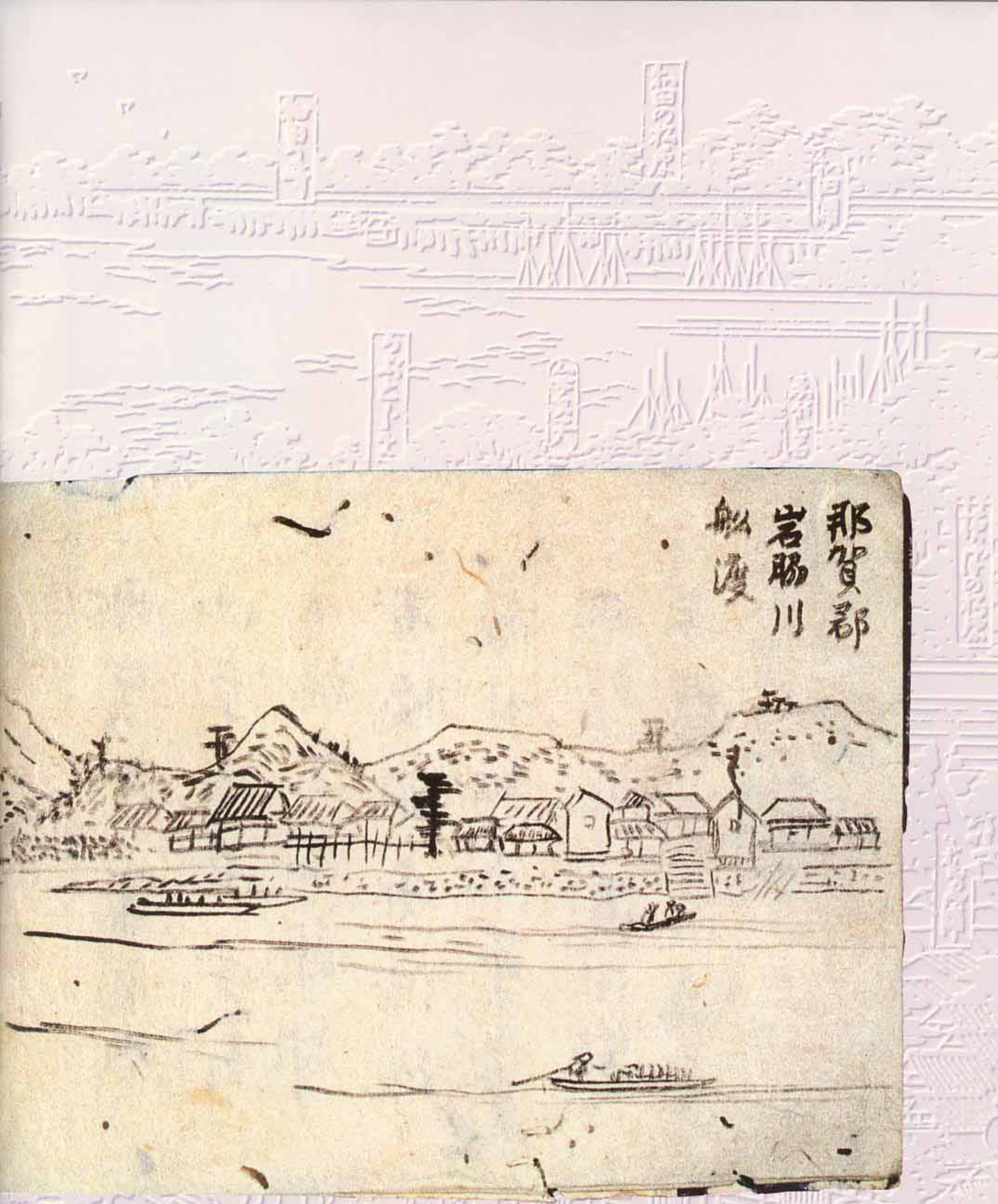
ある時、観音寺に愛犬がいたが、狂犬となり人をかんだので、人々を捕らえてつないでおき、閑々子に相談したところ、「人命に代え難い、殺しなさい。」と言った。

書画を書くのを乞う者が多かったので、謝礼の代わりに泉水の水を換えさせる作業をさせたので、「換水和尚」といわれた。博学であり、詩・書ともにすぐれ、画は超俗の風格があり一家をなしており、遺作は比較的多く残っている。国府に行く途中で、発病し二軒屋の観音寺で亡くなった。時に文政一〇年六月十五日、七六歳で死去。小松島市中田町奥林の天王山成願寺に葬られた。

閑々子直筆の『間雅啓復』


書の心得が記されている


峻山天如律師は閑々子である



第8回 企画展　**近世小松島商人の蔵書** ―多田・西野家文庫を中心に―

発　　行　平成6年4月26日
編集・発行　徳島県立文書館　〒770　徳島市八万町向寺山　TEL 0886－68－3700
印　　刷　原田印刷出版㈱　〒770　徳島市西大工町4-5　TEL 0886－22－2356